アルメニア四十日

画家　中川　一郎

牛と羊と無限の山菜で

〝アリー、アァリ〟（出ておいで）。家人が口々に呼びかけている。明け方の空気が壁の間に冷んやりと淀む8月の初め、戸口から1頭、ためらうようにまた1頭、カロバはそんな動き方をする。淡褐色の中型乳牛だ。バランス良く柔軟、二つに分かれた偶蹄で岩角をつかみ踏みしめながら急峻な崖っぷちを上手に歩き、好みの草を探している岩場の牛たちである。家人の言葉を解し、同じ存在だと思っている。放牧場への坂道は、牛と羊と送りだす村人で賑わっている。総出だ。マテボシャン家の一団も、盛り塩をなめ元気よく行列に入っていった。行列は弾んでいる。アルメニア中央高地、コーカサス山脈続きの岩盤地帯で標高2000m、岩山の裾棚に60戸ほどの酪農のアパラン町、ルサギュウ村がある。太古からねんごろに生きつづける牧民の姿を見たかった。

ルサギュウ村の民家。壁は石積み、後ろは岩山

太古から生き抜いてきた

リンゴ林を抜けると広い。あれほど村にひしめいていた牛たちは何処へ消えたのか。茶褐色の岩山に日が差しているだけだ。地平の空に大山が、くっきりと朝日に雪が白い。アララト山（5160m）だ。人類の堕落を怒った神の洪水で、ノアと妻と動物たちの方舟（はこぶね）があの山頂に漂着したという創世記伝説。5千mの洪水。あの万年雪の下に舟の残骸がある、アルメニア人は信じて譲らない。岩間から、谷奥から、派手なシャツがポツポツと下りてくる。草場へ牛を送り届けた人たちだ。枝杖をかついで「お早よう！」。わざわざ握手しに来る。「お茶のみに来いよ！」心優しい人たちだ。

マテナダラン古文書博物館は柱とアーチの集積

褐色の山が守ってくれた

村中にひしめいていたものが山懐に消えた。忽然、横合いの斜面を登っていた一団が岩間に消えた。褐色の牛が褐色の山に消えた。アララト山を望む草原でピカッと光ったあたりを街道が通っている。グルジア方面から首都エレバンへの道だ。ここからは何も見えないが、通交量は多い。黒海とカスピ海に挟まれて、この辺りはユーラシアの十字路。かつてアルメニアは、古代ギリシア帝国の重要な一部であった。古代ペルシア、サラセン、オスマンなど渦巻く巨大政治の津波を、収奪や徴発をどうやって凌ぎ、牛たちを守ってきたのだろう。私は褐色の山が守ってくれたのだと思った。

8月のある夕方、村長がマテボシャン家を訪れた。今朝羊が1頭屠（ほふ）られたのはこのためだ。50歳ぐらい。所用と日本の画家を見にきたのだ。村の中心部に豪華な公会堂があるが荒れている。建てかけのホテルも廃墟に。アルメニアが参加していたソ連邦共同体が崩壊して20年。一体、共同体は村に何を残したのだろうか。村長に訪ねると、右の指で丸を作り「これが無いんだよ」と。

強く優しい人たち

道端でお婆さんが水をかけながら牛糞を洗っている。もみ洗い、ヘチマのような草の繊維を残し、パンパン叩いて丸め干し並べていた。大切な燃料だ。その燃料で釜を熱しパンを焼く。マテボシャン家の牛舎の奥がパン工房になっている。近所の主婦の応援で4人分業、延ばした小麦粉を手でくるくる振り回し薄げる。数分で香ばしくキツネ色のパンができる。牧民のパン保存食。普通のパンも焼く。

夕方になると牛たちが帰ってくる。家族連れだ。山を歩くときも一緒らしい。村の細道で画帳を広げて仕事していた私の後ろに5、6頭が立ち止まっているのに気づき、ごめんとあわてて道をあけると、また歩きだした。乳絞りは何枚も描いた。牛脇に頭を押しつけるようにして鼓動を聞きながら静かに絞る。母親同志の心が通じ合っている。子牛が私を押し退けて母親の乳房に食らいついた。

8月も半ばになると、村のあちこちに乾草を高く積み上げたニオが岩山やポプラに映えて夏の色だ。マテボシャン家へニオ積みに来たテラノフさんに招かれて訪れた。石積みの立派な2階建てを自分で造り仕上げた。庭にブイク（若い種牡牛）が1頭繋がれていた。「危ないからそばへ寄らないでね」と言って、もいだリンゴを食わせ、牛と私の間に立って息子がこいつに追いかけられて屋根まで逃げたと話した。グレー色大理石のシャワー室で私の背中を流してくれた。主人は、ワインを勧めながら生い立ちも話してくれた。真っ暗な道を私の体をしっかり支えて送り届けてくれる懇ろさであった。

（東京都在住、能美市出身）

暑中お見舞い申し上げます

金沢医科大学
名誉教授　平口哲夫

自宅　〒九二〇-〇九三一
金沢市小将町七-二一
TEL　〇七六-二六四-〇二一〇
E-mail：kosyomachiruka@yahoo.co.jp